

劣者として、位一級を進められ、郡司としては最上級の  
 外従五位下に叙せられた記事で、当時の国司は従五位下  
 豊後守安倍(阿部)朝臣石行であった。安部石行は同年  
 七月、紀朝臣千世と交替したが、海部公の功績を朝廷に  
 上申したの故、おそらく石行であったにちがいない。佐  
 伯宿祢久良麻呂と、海部公常山は全く關係のない氏族で  
 ある。常山が行賞されたころ、久良麻呂は従四位上齋門  
 督で、現在の警視總監のような職にあった。彼は前年十  
 一月に遷都した長岡京の造管調係者で、その功によつて  
 延暦五年正月に左京大夫に任ぜられている。もはや彼は  
 一介の地方官ではなく、宮廷の顯官であった。もつとも  
 久良麻呂は佐伯部をひきいる佐伯宿祢であるから、海部  
 部のうち佐伯部があったとすれども佐伯部はの前身が佐  
 伯部であれば、郡大領の海部公と全然關係がないとはい  
 りれないが、豊日志のいうように親子の關係ではない。  
 (つづく)

史話

塩 浜 物 語

へ次間艦、佐伯の薩軍を砲撃す

本会元顧問 故山 田 平 之 丞

(遺稿)

明治十年五月廿五日、賊三百重岡より佐伯に入る。県  
 南の風雲急。浅間艦警を聞き佐伯湾に出動、守後沖に投  
 錨す。廿六日午前七時、艦長緒方惟勝少佐は、福間陸家  
 少尉に水路の深淺と陸上の偵察を命じた。

水兵二十名ほど短艇に乗りて、水深を測量しつつ内川  
 の上流にのぼり来ると、塩浜沿岸堤防の一角、かんちく

密の中に伏せていた三、三十の賊が一斉射撃をかけた。

不意さうたれた艦中の水兵は、オールを棄て艦内に倒  
 れて敵弾をよけたが、死者二名傷者数名、周章本艦に帰  
 艦した。危急を知つた浅間艦は、賊の比喩と認めたの故  
 松岡を目標として初弾をおくった。

砲撃は午後四時ごろまで続いた。その盛んになるに及  
 び、所内中央部目抜の場所にも落下したが、大部分は自  
 灣方面に落ちた。所内には弾の落ちた地点は、松岡、中村  
 の農家、中村外の角池(現東小學校庭)、久成寺境内、桜  
 工事榎郎の堀、内所米産(今川)の屋上、船頭所田島(日向  
 屋)の屋上、同護岸の倉庫等々。西南征討記によれば  
 六十三発射されたことである。

昭和八年佐藤蔵太郎「稿本佐伯城市沿革史」の「塩田  
 の余下に云ふ。

塩浜は城市舟近の地に古くより存したること、塩  
 屋村の名称による北明かなる所なり。(中略)其他域は番  
 直川口に沿いたる新開地に在り。又対岸長島新地の北  
 帝にも一區の塩田ありしかど、両所とも今は廢絶して  
 たが塩浜の名称のみ残れるなり。

塩浜には漢竹の生垣をめぐらしたるが、明治十年西  
 南の役、海軍の浅間艦守後沖に乗り、短艇を下して川  
 口の水先を測量せしめ、艇岸下に至るや、薩兵三、三十  
 名竹垣の裡に潜伏し、不意に起つて一斉に短艇を射撃  
 し、艇中の水兵は悉く仆れた。これ十年廿六日午前  
 九時過ぎの事にして、予は当時親しく実況を目撃せり。  
 後予の郵便報知新聞に在るの日、東京府会議事堂に  
 於て、東京日々新聞社員弓削某なる人に会せし時、或  
 は当年浅間艦乗組の水兵にて、当時の思出話を交し、  
 そのとき二名戦死し、数名傷つきし由を告げたり。

(以上)